

「オネエ所長の調査ファイル」 # 37

山崎浩治

「子どものころ、『赤毛のアン』や『あしながおじさん』『小公女』のような孤児小説が好きだったわ」

「サオリは案外、夢見る少女だったのね」

「孤児願望があったのよ。おっさんの娘だってことを忘れたかったから！」

「あたしが昔、愛読した『赤い靴』の主人公も孤児。あたしの心の中にも『舞踏会に憧れる少女』がいたのよ」

「おっさんは少女を連れ去る童謡の『異人さん』がお似合いだけどな！」

「主人公の少女は赤い靴を手に入れて夢をかなえるけれど、それと引き替えに永遠に踊り続けることを宿命づけられる。あたしにとって、赤い靴はまさに女装そのものよ。バレエを踊り続ける『赤い靴』の少女のように、あたしも女装して死ぬまで踊り続けるの」

「おっさんは死ぬまで盆踊りを踊ってる！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とツンデレ調査員の沙織が聞き込み調査中だ。市山はこの日、黒のブルゾンと細身のクロップドパンツ、首にストールを巻いて女装している。

今回の依頼人は金沢市に住む会社員・昌行(45歳)と由美子(44歳)である。夫婦は2年前、乳児院で養育されていた当時2歳の翔と特別養子縁組をしたが、半月ほど前、産みの親である唯奈(21歳)から「息子を引き取りたい」と連絡を受ける。唯奈がいま、どんな状態なのか、そして彼女の真意を調べてほしい、という依頼だった。

唯奈は高校中退後、バイト先で知り合った妻子持ちの上司の子を妊娠。「妻と別れ、君と結婚する」という言葉を信じているうちに中絶可能な22週を過ぎ、出産せざるを得なくなった。ところが交際相手は突如、会社を辞めて、妻子とともに姿を消す。バイト先の社員によると、故郷の関西に帰ったという。やむなく私生児として出産した唯奈は「子どもを一人で育てる自信がない」と生後間もない翔を乳児院に預けたのだった。母子が一緒に過ごしたのは1週間にも満たなかったという。

依頼人夫婦が翔を引き取ったのは、その約2年後である。夫婦は6か月以上に及んだ試験養育期間を経て、家庭裁判所に特別養子縁組を申し立てた。特別養子縁組には実父母の同意が必要だが、家庭裁判所から呼び出しを受けた唯奈はこの時、異議を申し立てることなく、同意している。ところがいまになって、家庭裁判所の当時の書類から依頼人夫婦の住所を調べて連絡してきたのだ。

「赤ん坊の養育を放棄しておいて、いまさら引き取りたいってどういうことよ」

聞き込みの途中、口を尖らす沙織に、市山が答えた。

「彼女の申し出には、母子家庭の方が行政から援助を受けやすいという打算があるのかもしれないわね。翔君を強引に連れ去る可能性も否定できないから、しばらく行動を監視しましょう」

「彼女、生まれたばかりの翔君を乳児院に預けたまま、ほったらかしだったそうよ。将来的に引き取る意思があるのか確認するために、児童相談所が呼び出しても一度も面接に来なかったらしいわ」

数日後、依頼人夫婦を「金沢プライベート・リサーチ」に呼んだ市山が調査結果を報告している。温和な人柄がにじみ出た夫婦の前に、数枚の写真が並べられている。派手な茶髪に厚化粧の唯奈が隠し撮りされた写真だった。

「彼女はいま、飲食店のアルバイトで生計を立てている。両親は彼女が幼稚園のころに離婚。金沢市内に住む40代の母親とは翔君を産んで以来、絶縁状態よ。暮らしはお世辞にも楽と言えない。今回の彼女の申し出は、お金が目的と考えざるを得ないわね」

「そうですか……」依頼人夫婦が困惑して顔を見合わせる。市山が続けた。

「普通養子縁組なら、養子となっても実親との親子関係は消滅しない。でも、あなたたちは実親との親子関係が消滅する特別養子縁組を翔君と結んでいる。翔君と彼女はすでに法的に親子じゃないし、翔君の戸籍を見たって彼女のことはどこにも記載されていない。『引き取りたい』なんて申し出は無視することね」

「しかし……」心配そうに口を開いた昌行に、市山が言った。

「彼女が今後、翔君につきまとうようなら裁判所に申し立てて接近禁止命令を出してもらおうといいわ。命令が出たら半年間は翔君に近づけない。彼女もその間、頭を冷やしてよく考えるでしょう」

市山の言葉に、昌行が穏やかに首を振った。

「翔を産んでくれた彼女を接近禁止になんてできませんよ、探偵さん」

由美子も微笑んで、付け加えた。

「私たちは唯奈さんに心から感謝しているんです。彼女がいなければ私たちは翔に出会えなかったのだから」

◇ ◇

30歳で職場結婚した時、子どもはすぐに授かるものだと考えていた。4月から産休に入れるように基礎体温を測って排卵日を割り出し、タイミングを合わせる。子どもの名前はもちろん、長じた後の習い事まで昌行と話し合っていたけれど、妊娠することはなかった。

不妊治療を始めたのは結婚3年目だ。その時も治療を始めたら、すぐに妊娠できると漠然と思っていたが、吉報は訪れなかった。「次こそ」「いまやめたらこれまでの努力がムダになる」と不妊治療を重ね、人工授精や体外受精にトライしてみても、赤ちゃんを授かることはなかった。

治療を断念したのは由美子が40歳の年である。身も心も経済的にも限界だった。しかし、どうしても「子育てしたい」という夢は捨てられず、児童相談所で里親登録したのは治療をやめた直後のことだった。

「犬や猫をもらうんじゃないのよ！　自分がお腹を痛めた子でもないのに苦勞を背負い込むのは

やめなさい！」

由美子の母はそう言って養子に猛反対したが、決意は揺るがなかった。翔が家にやってきたのは、2歳の時である。最初の数日こそ、お行儀良くしていたものの、数日もすると飲み物やおもちゃを部屋にまき散らしたり、由美子の腕に噛みつくなどの「試し行動」を見せるようになる。わざと大人を困らせ、自分への愛情を試すのだ。それが過ぎると今度は、哺乳瓶でミルクを飲みたがる「赤ちゃん返り」。最初こそ翔が家に来てくれただけで満足だったのに、思い通りにならない翔に手を焼き、声を荒げて叱ったこともある。子育てには体力を使うので、「もっと若いうちに養子をもらうべきだった。もう手遅れなのか」と何度も心が折れかけた。けれど翔のあどけない寝顔を見ている時の幸福感がすべての不安や焦りを吹き飛ばす。

翔が初めて由美子を「ママ」と呼び、笑った日のことを鮮明に覚えている。由美子は翔を抱きしめながら笑い、そして泣いていた。半年以上の調査期間を経て家庭裁判所から許可をもらい、晴れて正式な親子となったのは翔が3歳になる目前だった。

血はつながっていないけれど、誰が何と言おうと、私たちは親子だ。

由美子も昌行も、そう信じている。「赤の他人が産んだ子どもなんて、かわいがれるはずがない」と言っていた由美子の母は、いまでは翔の一番の遊び相手となっている。

◇ ◇

「うちと翔がもう親子じゃないことは知ってるよ。でも子どもを返してくれないのなら、翔が養子だということをあの子に話す」

「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた唯奈がぶっきらぼうに言った。茶髪に厚化粧、ミニスカートという唯奈のファッションに、市山がため息をついて言った。

「翔君のご両親は親戚をはじめ、ご近所にも翔君が養子だということを包み隠さず話しているわ。アルバムを見れば赤ん坊のころの写真が一枚もないし、血液型だって違ってる。嘘を吐くと、かえって翔君を傷つけてしまうと考えたの」

唯奈が言葉に詰まって唇を噛んだ。

「ご夫婦はあなたが経済的に困っているなら、少し援助してもいいと仰ってるわ」

市山の言葉に、唯奈が怒気をはらんだ口調で言った。

「お金がほしくて、翔を返してほしいと言ったんじゃない！」

不意に顔を伏せた唯奈がくぐもった声で続ける。

「うちは母子家庭で育ったから、あの子に同じ思いをさせたくなかつただけ。だから産んですぐ施設に預けたの。抱っこもしなかった。抱っこしたら情が移ると思ったから。でも、ずっと後悔してた。うちが翔を育てなきゃいけなかった、って」

顔を伏せたのは、あふれる涙を見せたくなかつただからだろう。だが体が震えていることまでは隠せなかった。

「捨ててごめんね、捨ててごめんね、翔」

嗚咽まじりに繰り返す唯奈に、市山が優しく語りかけた。

「あたし、あなたのことを誤解していたみたい。ごめんなさい。でも誤解してたのはあたしだけじゃない。あなたも誤解してる……あなたは決して翔君を捨てたんじゃない」

「えっ」真っ赤な目をした唯奈が顔を上げた。

「あなたは親として最後の責任を果たしたのよ。ご夫婦だって、あなたに感謝してるわ」

「そんなの嘘よ！」

「あなたには産まない選択肢もあったし、翔君を産んで虐待していたかもしれない。でも、あなたは翔君のために乳児院に託し、彼の命を守った。そうでしょ？」

瞳からあふれる涙を乱暴に手の甲で拭った唯奈がひたむきな眼差しで市山に尋ねた。

「翔のためにうちができることはないの？」

「翔君の幸せを祈りなさい。親なら誰だってしていることよ」

市山の言葉に、唯奈が小さく笑った。笑うと口角が上がり、えくぼができる。見かけによらず、根は素直な子なのだろう、と市山は思った。

◇ ◇

それから数日後、依頼人夫婦のたつての願いで、唯奈と翔が初めて対面した。待ち合わせ場所である金沢市内の公園にやってきた唯奈は髪を黒く染め、ノーメイクだった。昌行と由美子が見守る中、遊具で遊ぶ唯奈と翔が言葉を交わしている。

「翔君のお父さんとお母さんはどんな人？」

「大人のくせに、ぼくと遊ぶのが大好きなんだよ」

「翔という名前は好き？」

「うん。ぼくを産んでくれたママがプレゼントしてくれたんだ。大好きなお名前だよ」

翔が笑った。両親に愛されて育ったことがよく分かる笑顔だった。昌行と由美子は、唯奈が産みの親であることを翔に教えてもいいと伝えていたが、唯奈は結局、そのことに触れなかった。公園の砂場で楽しそうにお喋りする唯奈と翔を、市山と沙織が離れた場所から見つめている。

「彼女、母親の顔になってるわね」

市山がつぶやくと、沙織が感慨深そうに答えた。

「でも不思議。翔君の顔立ちはどこか依頼人夫婦に似てる。血はつながっていないのに」

「夫婦だって、もともと血のつながりはないわ。沙織、1年目の結婚記念日が何婚式か知ってる？」

「紙婚式でしょ」

「紙だった夫婦がやがて銀や金になる。血のつながらない親子だって同じよ。あの親子だっていつかダイヤモンドやプラチナになるわ」

その年のクリスマスイブの夜、昌行と由美子夫婦は唯奈を自宅に招き、ホームパーティーを開いた。冒頭、昌行は翔に唯奈が彼の産みの親であることを教え、由美子は「翔君にはお母さんが二人もいて幸せね」と語りかけた。夫婦にとって唯奈は我が子への「クリスマス・プレゼント」だったのだろう。

「親は何人いたっていい。あなたさえよければ一緒に翔を育てましょう」

昌行から告げられた唯奈はその場で号泣した。その聖夜、翔は由美子を「お母さん」、唯奈を「ママ」と呼び分ける繊細な優しさを見せたという。